



# 苮木だより

No.1  
2012.1

## ■人物紹介

**水田 利穂** (みずたとしお) さん 苮木自治会長・71 歳

水田さんは現在、苮木地区の自治会長を務めており、地区をまとめてあります。この苮木で生まれ育ち、少し前まで農業を生業として、この地を耕してこられました。インタビューした内容をまとめてご紹介いたします。



## 縄文時代の石斧を発見！



苮木遺跡  
石斧 (蛇紋岩製)

最初に見せていただいたものは、昭和 40 年に、水田さんが畑で作業中に偶然発見した直径約 20cm の青い石。それは、なんと縄文時代の石斧でした。富士町周辺には、縄文時代の遺跡が数多くあり、出土した場所も苮木遺跡にあたります。

このことは、『富士町史』にも記載されており、7000 年も前に苮木辺りで営んでいたであろう縄文人と、今も同じ土壌で暮らしている水田さんとの時空を超えた繋がりを、石斧から感じることができました。

## 藁細工の名人

水田さんは「藁苞」(わらつと) (藁で作った包みのこと) 作りの名人でもあります。昔は、祝いごとなどがあれば、藁苞にたべものを入れて手土産として渡す習慣があったそうです。

今ではビニール袋に変わり、作る機会は減ってきているようですが、それでも作るための道具は、綺麗に作業場に並んでいます。

そんな藁細工職人の水田さんが、毎年、正月準備として佐賀城本丸歴史館玄関に設置される「鼓の胴の松飾り」(横 1.5 m) を二人で 4 日間かけて作りあげられました。



佐賀城本丸 鼓の胴の松飾り

## “望郷の丘公園”と“望郷の碑”

水田さんの希望は、世間では限界集落と呼ばれる集落にあたる苜木地区を、“元気にしたい”ことです。

世帯数、人口ともに減ってきている現状を何とかしてくい止め、できれば苜木から離れた人々に戻ってきてほしい。お盆や正月になると離れていた人々が一時戻ってくる。そんな離郷者のためにもと、集落のシンボルとして昨年3月に行われた「苜木ふるさと会」の時に、“望郷の丘公園（仮称）”と称して皆で桜などを記念植樹されました。

名称のアイデアは、唐津出身の作家で北方謙三氏の小説『望郷の道』で、主人公夫妻（モデルは実在の北方氏の曾祖父母）の出身地は同じ富士町だということがわかり、縁を感じ名づけられたとのこと。

さらに、離郷者に苜木のことを心の片隅においてもらえるよう、“望郷の碑”を建てるとを目標にしたいと力強い言葉を聞くことができました。



望郷の丘公園



『望郷の道(上・下)』幻冬舎刊

## 至福のときは？

最後に、水田さんにとって「至福のとき」は何ですか？と質問をすると、真っ先に出てきた言葉は、「温泉！」。車で5分程のところにある富士町の古湯温泉に、浸かりに行くことが毎日の日課とのこと。

また、自治会長として、配布物を配りに集落を一軒一軒訪ねると、一人暮らしの方と話し込むことが多い。からだのこと、孫のこと、畑のことなどを話していると、人とのつながりがとても大切に思えてきて、仕事ながらもよもやま話ができることも「至福のとき」と言われたことが印象に残るインタビューとなりました。

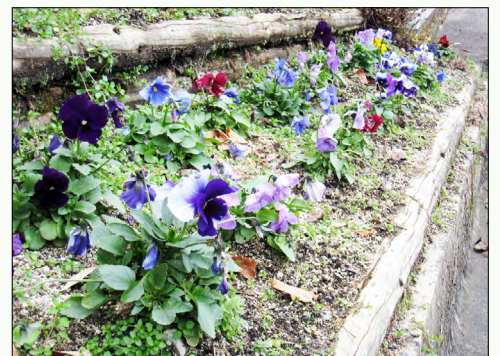
## 編集後記

初対面にも関わらず、水田さんには丁寧にインタビューに答えていただきました。ぜひとも望郷の碑が実現してほしいと願うと共に、苜木に流れる至福の時間がたくさん増えていくことで、「至福のムラ苜木」として続く限り、「限界集落」という言葉もいつか無くなる？

自分も苜木ファンの一人として、度々訪れるとしよう（H.S）



集落の一番上から望む



公民館脇に咲くパンジー